

瑞籬の神の御代より篠の葉を手草にとりて遊びすらしも、此意成べし、萬葉集には神樂をもよめり、江次第石清水臨時祭試樂に、舞人吳竹をもて挿頭とし、竹文青摺袍をきるよしいへり、されば神樂に篠を用る其故ある也、天照大神磐窟かくれませし時に、天鈿女命の俳優したまひし、是ぞ神樂の始めなりける、その時に竹葉爲手草といふ、舊事紀古事に見えたり、

〔古事記上〕故於是天照大御神見畏、閉天石屋戸而刺許母理、坐也、天宇受賣命、手草結天香山之小竹葉、而於天之石屋戸伏汗氣、而踏登杼呂許志、爲神懸、

〔古事記傳八〕小竹葉は佐々婆と訓べし、下卷輕太子の御歌に見ゆ、萬葉十四丁にも佐左葉とよみ、今世にも然云り、さて萬葉集に佐々那美、神樂聲浪と書るとも、樂浪と

音の、佐阿佐阿と鳴に就て、人等も同く音を和せて、佐阿佐阿と云ける故なるべし、猿樂の諸物の聲ぞ樂むと云も、松風の颯々と又竹葉の名を佐々と負るも、此音よりぞ出つらむ、細小の意

末方安以佐々々々と云ことあり、是は佐々佐々と唱たるか、又は佐阿佐阿を如此書るか、何に爲手草とありて、飲慰振其葉之調也と云り、

〔神樂歌〕採物歌 篠

此さ、はいづこのさ、ぞとねりらが、こしにさがれる、ともをかのさ、ともをかのさ、

さ、わけば、袖こそやれめ、とね川の、いしはふむとも、いざ川原より、いざかはらより、

或説